

OrdinarieS

# OrdinarieS

著作・Kouichirou.

製作・BMES/Breaker Multi Entertainment Studio

-Index-

Ordinary 1. いつまでも幼なじみ

Ordinary 2. 有名すぎる一般人

Ordinary 3. 信頼と告白の関係

Ordinary 4. 積もる話

Ordinary 5. 懐古がよみがえる時

## **Ordinary 1. いつまでも幼なじみ**

Ordinary 1. つしまでも幼なじみ

「まだ春になったばかりなのに、意外とあつたかいな」

セーヤは自転車をこぎ、めがねを少し下にたらしながらつぶやいた。学校からの帰り、時間にして西の空が少し夕ばずんでいる。桜の花びらもまだ開いていないこの時期、いつもならばいまだ肌をちくちくと刺す風が吹いているはずなのだが、最近は温暖化のせいなのだろうか、生ぬるい風が吹いていた。桜といってもそのきれいな姿を見られるのは学校の校庭か近くにある名も無い低い山のみで、平地にはなんのおもしろみもないねずみ色のコンクリートがただ延々と続いている。

しばらく自転車をこぎすすめると、堤防にあたった。そこからセーヤはゆつくりと自転車のスピードを抑えて走った。

今から数年前の小学校三年生のころ、父カズマの仕事の都合で田舎風情の漂っていた町からいっぺんして都会で過ごすことになった。

慣れ親しんだ町を去る当日の朝、セーヤは隣りに住んでいた同い年で幼なじみのコトネに別れのあいさつを言いに行った。内気で物静かなセーヤがクラスメートにちよつかいをかけられていると、いつもコトネが助けてくれた。そのお礼も兼ねて、彼は引越しの準備を早めに終えて隣の家へと向かった。

「コトネちゃんーん！」

いつものようにコトネを呼んだ。しかし、その後の「はい」の元気のいい返事が無かった。聞こえなかったのかなと思ったセーヤは、さらに大きい声でコトネを呼んだ。

「コトネちゃんー!!」

そう叫ぶと玄関のドアが静かに開いた。そして、そこには髪がボサボサのコトネがいた。いつもならニカツと笑って出てきてくれた彼女だが、そのときは目に涙を浮かべ、それこそ虫にダイレクトに刺されたかのように真っ赤になっていた。セーヤははっとした。

「セーちゃん、都会に引越すんでしょ？ お母さんから聞いたよ。……もう逢えなくなるね」

「そうだね……。だから、お別れを言いに来たんだ。いつもありがとう、助けてもらってばかりで」

セーヤも彼女の純粋な気持ちに直面して思わず涙を流した。

「あえなくても、いつまでも幼なじみだからね」

涙でうまくいえない二人はお互いの目を見てそう約束した。

自然の多い道を選んで帰る。セーヤは昔、コトネと両脇が一面田んぼであるあぜ道をよく歩いていた。

セーヤは高校2年になる今でもその気持ちから抜けられずにいる。コンクリート地獄であるこの都会で自然が残っているところといえれば堤防くらいのものであり、そこを通るたびにそこに咲いている草花を見つけては一呼吸つく。そしてさも思い出したかのように心の中でつぶやく。

「そういえば、あんな日があったなあ」  
——と。

朝、家を出てから学校に着き、授業、部活、その後帰る。このサイクルの中で、セーヤは彼女との約束を守るために堤防の横の道を通るようにする。そして再び自転車をこいで家へと向かった。

「ただいま」

と、いつものように言った。

「おかえり」

母ミキエが言った。

セーヤはいつものように2階に上がり、部屋のベッドの上に重たいかばんを投げ出して漫画を読む。するといつも妹のミミが、分からない問題を持って質問してくる。そうしていると夕食の時間になる。カズマはたいてい帰りが遅いのでセーヤとミキエ、ミミ、そして祖母のウミの四人で夕食を食べる。祖父カヨエモンは二年前にガンで他界した。

夕飯の後はテレビを見るのだが、ミミがたいていリモコンを支配しているので、セーヤはミミが見ている番組を見るはめになる。この日はある歌番組だった。

「次は如月サツキさんの“True NAME”です。この曲は先週オリコンで1位を獲得しました！ それではどーぞ」

さまざまな照明と煙幕の中、サツキがでてきて肩まである茶色の髪をぶんぶん動かしながら激しく歌い踊っていた。観客たちは彼女の歌にテンポにあわせながら手をたたいたり、体を大きく動かしたりしてのっていた。

「すごい人気だな。この人なんていう名前？」

「如月サツキよ、お兄ちゃん。そんなことも知らないの？ 今1番人気のアーティストなんだから」

ソファに座って見ていたミミが半ばあきれたように答えた。

「……へえ。ちよつと見ないとどんどん新しいヤツが出てくるからなあ」

「お兄ちゃんあんまり歌番組とか見ないもんね。もっと見るようにしたら？ これも勉強だよ」

「ははっ、まさか。勉強は学校ので十分」

セーヤは妹のちよつとした攻撃を、慣れたようにさらっとかわした。

如月サツキが終わって、次は四人グループの「テロップ」が出てきた。

翌日の学校は昨日の歌番組の話で持ちきりだった。

「如月サツキ、かわいかったよな……」

「テロップもかつこよかったよ」

そのざわめきの中、一人の生徒が走ってきて、呼吸もまだ整わないうちに叫んだ。

「おい、みんな！ 今度、この学校に如月サツキが転校して来るって！」

「マジで〜!？」

「エ〜！ うそ〜！！！」

この発言である者は泣き叫び、ある者は叫んだ生徒に本当か冗談かを問い詰め、ある者は何の興味も示さず、またある者は昨日夜更かしをしたのか机に顔をつけ寝ていた。この教室はおろか、この教室のある校舎、そして学校中にこの噂が広まった。

## Ordinary 2. 有名すぎる一般人

## Ordinary 2. 有名すぎる一般人

「ねっ！ ここは前置詞があるから、動詞をもつてきたかったら“く”すること”にするために動名詞にしないといけないね。前置詞のあとに動詞はおけない、これは覚えておいて損はないぞ」

いつにもまして英語の五十嵐先生がはり切っていた。いつもは髪がボサボサ、白髪は遠くからでも十分見えるのに、今日はばっちり髪型が整っており、しかもきちんと黒く染めている。しかし相変わらずその声だけは大きく、眠たくてもこの声のせいで眠れない生徒がおおい。と、いつもならこういう授業形態だったのだが、今日に限っては彼の授業で無理やり起こされている生徒はだれ1人としていず、このクラス中の生徒、いや学校中の生徒はみな緊張感とワクワク感に満ちていた。

そう、あの噂になっていた有名人が転校してきたのだ。

時は3時間ほど前にさかのぼる。

いつものようにセーヤは全く人が通らないような道を通って登校してきた。人がいるところよりもいないところのほうがなにかとのびのびできるからだ。

いつもその道はセーヤが登校する時間帯はぜんぜん人がいなかったのだが、今日は、その道の途中で自転車ごと倒れている一人の女の子を見かけた。

「どうかしましたか？」

流石に声をかけないわけにはいかなかったものでたずねてみると、同じ学校の制服を着た女の子であった。肩までかかっているきれいな黒髪がひらりと翻り、黒色をした瞳が言葉もなくセーヤのほうに向けられ、そして一瞬目が合った。

「えっ……、あつ、あの……」

この女性は恥かしいところを見られてしまったかのように言葉をつまらせ、目をきよろきよろさせた。

「えつと……、自転車ごと倒れていたからどうしたのかと思ったんですけど……、大丈夫ですか？」

「……えつ、はい、あの、大丈夫です」

いやに彼女の様子がよそよそしいというか変だった。

「んっ？ あつ、ひざをすりむいてるじゃないですか。ちよつと待っててください」

そういうとセーヤはかばんの中から一枚のばんそうこうを取り出した。以前けがをしたときからあったほうがなにかと便利だろうと思いつきそのままかばんの中に入れていたものだが、意外なところで役に立った。そのばんそうこうをすつとその子に差し出した。

「どうぞ」

「あ、すいません……」

ばんそうこうを受け取ったのを見届けて、セーヤは「それじゃ」とだけ言って先を急いだ。

「あ、あのうー！」

突然彼女が大声でセーヤを呼んだので、セーヤは自転車を止めて彼女のほうを振り向いた。

「ありがとうございます」

彼女がおそらく痛むであろう足を我慢して立って一礼した。セーヤも軽く頭を下げて再び前を向き自転車をこいだが、なかなか心にの中はうれしかった。

その出来事から5分くらい経ったであろうか、セーヤの後ろからさっきの女の子が勢いよく自転車をこいで追いかけてきた。

「はあはあ、やっと追いついた。すいません、私、今日あなたと同じ高校に転校してきました。制服が同じですから。それで、初めてなんでついて行っていいですか？」

セーヤはそのスピードに驚いた。5分といっても、自転車での5分はけっこうな距離に相当する。

「……転校生、なるほど、だからか」

「えっ？」

「あ、さっきあなたが転んでいたあの道、ほとんど人がいないから、人がいるなんて珍しいなって思ってたんですよ」

「ああ、そうですか。あの、そういえば名前、まだでしたね」

「あ、僕は橋野つていいいます」

「私は、えつとく、赤吹ユズカつていいいます。2年5組に入ります。よろしくお願いします」  
「あれ！？ 同い年なんですか？ 僕も2年生なんですよ。クラスは違うけど」

「ええっ、そうなんですか！？ 私てつきり3年生かと思ってました」

ユズカといったその女性は笑いながら言った。その顔を見てセーヤは少し照れてしまった。

「あの、ひざの傷は大丈夫なんですか？」

「はい、たいしたこと無かったですから。ばんそうこう、ありがとうございました」

とりあえずセーヤは一安心し、三度自転車をこぎ始めた。

はじめ2人は並進して走っていたが、次第にユズカがセーヤの後方へ行ってしまう2人の間に沈黙が続いた。

そうしているうちに学校の校門が見えてきたが、いつもと違うその様子にセーヤは心臓が飛び出るほど驚いた。普段なら学校の領域をあらわにしている真つ白い壁も今日は人がたくさんいて壁の白い部分が見えなかったのだ。なぜ今日学校の前がこのような状態なのか、もしかしてなにかの行事があつて早く来なければならなかったのか、セーヤは不安になった。

セーヤが群衆の前を恥ずかしげに通っていると、急に女の子たちの黄色い声と男たちの『サツキちゃん』コールが始まった。何が起こつたのか状況が飲み込めないセーヤは、群衆の視線を逆にたどつてその“サツキちゃん”と呼ばれる人物がどこにいるのかを見つめた。

「もしかして……」

視線の先をたどることセーヤは後ろを振り返つた。さつきまで彼のすぐ後ろをついてきたあの彼女がいつのまにかかけっこう後ろのほうにいて、うつむいて前を見ることができずほおを赤らめていた。彼女は黙つてセーヤのあとを、なるべく距離をおいてついていった。

校舎の裏の自転車小屋にまで群衆は追いかけてきて、彼女を取り囲んだ。校舎からもたくさんの観客がこつちを見ている。セーヤはあまりの人の多さに自転車を置いても玄関まで行くことができず、立ち往生するはめになった。

（もしかして、あの人つて……、なんとらサツキとかつて言う……？　そういえばあの人

も今日転校してくるって誰か言ってたっけ……)

しかし考えるだけ無駄なだけで、この群集が去ってくれるまでセーヤは動くことすらできない状態ではなかった。

その後、この騒ぎを聞きつけた先生たちが急いでこの人だかりを対処し、セーヤの後ろをついてきた彼女は先生に囲まれるように職員玄関のほうから校内に入っていた。

彼女自身は“赤吹ユズカ”だと言っていたがもしかしたらそれは本名で、“如月サツキ”という名前は芸名かもしれない。しかしもしそうならさっきの自己紹介のときにカミングアウトするだろうから彼女とアーティストは別人かもしれない、とセーヤは考えていた。

噂によると、あの五十嵐先生は如月サツキの大ファンらしい。2―5も彼は受けもっているのです、先生の喜びは尋常ではないはずである。

やっこの思いで教室に入って、もみくちやにされた制服や髪を簡単に整えると友達のケンがセーヤに話し掛けてきた。

「なあ、お前今日サツキちゃんと一緒に学校来なかったか？　ってどうか来ただろ」

「えっ？　ああ、彼女は赤吹って名前で、如月じゃないよ」

「お前気づかなかったのか？　あの子が如月サツキだって。そのアカフキってのは本名だろ、どうせ」

「どうかなあ。そのこと特に言っていなかったし……ただ似ているだけかもしれないだろ」  
クラス中の生徒が二人の会話に聞き耳を立てていた。その様子に気付いてセーヤは目線を動かすことができず、背中には気持ち悪い汗がたーっと落ちていくのが分かった。

「てことはお前、サツキちゃんと話をしたのか!？」

「まあ、彼女とは自己紹介をしたくらいだけど……」

「チクショー、セーヤに先を越された! 俺もアピールしておかないとやばいぜ」

そう叫ぶとケンはずいぶんすげい形相をけしかけた後教室を飛び出していった。結果はケンの顔を見れば明らかであった。生気を抜かれたような顔を。おおかた人が集まりすぎて近づくことすらできなかつたのであろう。

昼食の時間となつたのでセーヤは急いで教室をとびだして、パンを買い、そして校内の隅のとある木にもたれて食べて、その後昼寝をするのが彼の日課であった。

「こんなところにいたんですか? 探しましたよ」

最近聞き覚えのある声が聞こえたのでそのほうを向くと、今朝の彼女がそこにいた。

「ああ、今朝の」

「……」

なにかを言いたそうだったのだが声に発してくれなかつたのでセーヤが代わりにきいた。

「なにか御用ですか? えーつと……, 赤吹さん, でよかつたよね」

「い、いえ別に用ってほどのものじゃないんですけど。隣り、いいですか?」

彼女の表情が少し明るくなったような気がした。セーヤは首を縦に振った。



## **Ordinary 3. 信頼と告白の関係**

### Ordinary 3. 信頼と告白の関係

「今朝は本当にありがとうございました。今度お返しをしないと」隣に座っていた彼女はセーヤのほうを向いて頭を下げた。

「……いや、ばんそうこうの1枚くらいどうでもいいですよ」

さすがにそれだけでお返しをされるのも気が引けたので、丁重にお断りさせていただいた。「そうですか？ あの一、いつもここでお昼を食べているんですか？」

セーヤは「うん、そうだよ」とだけ答えた。まさかあれだけのことでここまでされるとは思っていなかった。セーヤは何を話しているのか分からなかった。

(どんな話題がいいんだろう?)

パンをほおぼりながらセーヤが何を話そうか考えていると、ユズカは彼の表情があまりいい感じではないととらえたのであろうか、

「あ、あの、もしかしてお邪魔ですか？ それなら……」と不安げに言うと、セーヤはとっさに、

「うん、別に邪魔ってわけじゃないんだけどさ……、何を話したらいいか分かんなくて」とつい本当のことを言ってしまった。

一瞬まるで時が止まったかのように何の音も聞こえなくなったかと思うと、すぐにユズカが明るい口調で答えた。

「そうでしたか。あの、気にしなくていいですから……ハア」

彼女は軽くため息をついた。風が吹いて木の葉がカサカサいう鳴っていたが、セーヤにはそのため息が十分に聞こえた。

そのとき、セーヤの心の中でとても小さななにやら錠（ロック）のようなものが外れ、そしてセーヤは思い切って彼女にあることを尋ねてみた。

「あのさ、ちよつと聞きたいことがあるんだけどさ」

「はい？」

「あの……、赤吹さんつてもしかして如月サツキとかつていう歌手の人？ 確か、最近の歌番組で見たあの人とは顔は似てるけど髪の毛の長さも違うし色も黒いし……」

万が一間違っているといけないので、彼女を傷つけないようやわらかい口調で、彼女のほうを向かずに校舎のある一点をみつめながらそう言った。

「……いいえ、違いますよ……。私、よく似てるって言われるんですけどね……」

セーヤはその答えを聞いてようやく心のモヤモヤ感が晴れたような気持ちだった。

「あ、そうだよね。今朝会ったときもそんなこと言ってなかったし、みんなが勘違いしてるだけだろう」

「……」

ユズカは急に下を向いて黙りこくってしまった。

「え、あの、なんか気に障るようなこと言ってしまった？」

「ううん」

さつきより低い調子で、首を横に振りながら答えた。セーヤは無理にでも彼女が急に静かになった理由を探し出し、彼女が持っていないなくて彼が持っているものが1つあったのでそ

れを言ってみた。

「あ、もしかしてごはんまだ？ まだなら、このパンあげようか？」

「えっ……？」

ユズカは彼の唐突な質問に少し笑顔を取り戻したそのとき、ぐうぐうという、お腹がすいたときの典型的な音が聞こえた。

「あっ」

ユズカはまた下を向いてしまったが、今のはさっきの様子とは違い明らかに恥ずかしがっている様子だった。

「はい、これ。もうこれしか残ってないけど、ないよりはましだろうから。あと、これはあとでお返ししてほしいかな、なんて」

「ハハ……、ありがとう。いつかお返しするね」

セーヤに向けてほほえんで言った。ユズカが彼からもらったパンをほおばると、それが気に入ったのかおいしそうに食べた。

「……それにしてもどうしてみんな間違えるんだろうね。そんなに似てるのかなあ」

そう言うとおいしそうに食べていた目が急に悲しそうになり、口の動きもいくぶん鈍くなったような気がした。

「パン、ありがとうございました。それじゃあ」

そうとだけ言うと彼女はすっと立ち上がり彼のもとを離れた。彼女の最後の一言は調が低く、彼女のうしろ姿からはなにかものさびしさを感じた。

もしかしたら彼女にとって“如月サツキ”というワードは禁句だったのかもしれないと

考えると、自分の言ったことに後悔の念を抱くようになった。

昼休みが終わってセーヤは急いで教室へと戻った。教室に入るとすぐに、ケンの怒鳴るような大声に歓迎された。

「おい、セーヤ！ お前、昼休みもサツキちゃんと話してただらろ！？」

「なんでそのことを？」

セーヤが疑問符を浮かべながらきくとケンは自慢気に、

「俺はサツキちゃんのファンだからな。一秒でも長く愛しいサツキちゃんを見ていたいしさ。お前には分からんだろう、この気持ち」

「でも、彼女はその人じゃないって言ってるぞ。他人の空似ってやつじゃあ……」

「それでもいいじゃん。サツキちゃんと話せて。俺なんかほぼ門前払いだからなあ……」

どうもケンには赤吹Ⅱ如月としか認識していないのである。答えが変だった。むしろ逆に彼女以外の人と話すときは、赤吹Ⅱ如月と考えたほうがなにかと都合がいいかもしれないとも思った。

二人はふと廊下を見た。

ぼつちりきめた蝶ネクタイにスーツ姿の五十嵐先生が、軽快なステップを踏みながらたいていそうご機嫌な様子で歩いていった。次は2ー5で授業なのだろう。

「ケン、見た？ 今の。蝶ネクタイだぞ、実際に人がつけているところなんて初めて見た」

「ああ、ああにだけはなりたくないよな」

五時間目は化学の授業、のはずであったが隣りの五十嵐先生がハイテンションで、大声

すぎて彼らの教室にまで響き渡ってしまい、まるで英語の授業を受けているかのようであった。

放課後セーヤは部活へ行った。いつものように、第三体育館の裏の吹奏楽部とオーケストラ部の共同練習場の二階でトランペットを吹く。彼のトランペットの腕はきわめて中間点である。

「先輩、あの如月サツキさんと話をしたそうですね」

後輩のフルートを吹くりホが、セーヤのところに来ていた。

「秋瀬さん、なんでそれ知ってるの？」

セーヤは赤吹Ⅱ如月の考え方を採用してこう返事をした。

「何言ってるんですか。先輩今日、彼女と一緒に来てたじゃないですか。会話してないほうがおかしいですよ」

「そ、そうだよね、はははっ。あつ、でもたいしたことは話してないよ。うん、別に……」別にあせる必要もなかったのだが、なぜかセーヤはあせってしまった。そしていつもより大きい音でトランペットを吹いたらむせてしまい、その様子を見てリホはそのまま自分のパートに戻っていった。

都会が赤く染まっている中、今練習中の曲を口ずさみながらセーヤはひとり自転車をこいだ。家についてもただいまも言わずに二階の自分の部屋に入っていた。

「お兄ちゃんおかえり〜」

部屋の中にはミミがいた。自分の部屋でも間違えたかと思ったが、部屋のレイアウトを見

る限りその部屋は彼の部屋だった。

「ちよつと辞書借りてるよ……ってなんか今日お兄ちゃん変だね。何かあった？」

ミミは自分の兄の何らかの変化に気づいたかのようにそう言った。

「さすがミミ。妹だけあってお前にはわかるか……、罪悪感ってやつだよ」

「ふん」

ミミは根掘り葉掘り聞こうとせず、そしてそのままセーヤの部屋を出て行った。

「あんまり悩んだり落ち込んだりしててもだめだよ、お兄ちゃん。時間はそのためにも止まってはくれないんだから」

扉を閉める前にミミが言ったこの言葉に、セーヤは妙に敏感に反応した。以前、妹が男性に振られて落ち込んでいたときに、彼がミミにかけて言葉とまったく同じセリフだったからだ。

「ハハ……、まさか僕が言われる側になるとはな」

ミミの言葉がよほど胸に響き、セーヤは気を引き締めるためにメガネをはずして両手で顔を思いつきりたたいた。

あれから二週間たっただろうか、人気者のサツキに会うことは容易ではなかった。ただ謝りたいだけなのに……セーヤはあれ以来ずっと思い悩みつづけていた。

四時間目終了後、いつものようにセーヤはあの木のもとに行った。その場所には、なんとユズカがいて木のほうをむいてうつむいていた。セーヤはここを逃してはもうチャンスがないかもしれないと、つばをぐくりと飲んで一步一步近づいていった。

「赤吹さん、えつと、あ、あのー」

次の言葉が出なかった。どうしても言わなければいけないことがあるのにどうしてもその言葉がのどから出すことができない。

「は、橋野君？」

突然不意を衝かれたように後ろから声が聞こえたので彼女は驚いて、後ろを振り返った。一瞬目が合ったがそれが2人にとっては異様に長く、しかしとても短く感じられた。

「えつと、どうしたんですか、ここに来て」

ついとっさにほかの言葉が出てしまった。その質問の返答に困ったのか、彼女はもじもじするだけで答えようとはしなかった。……答えることができなかった。

「えつと……、その……」

その姿を見てセーヤは自分がすっかりしないでだれがすっかりするんだという気持ちになり、腹をくくって言った。

「……赤吹さん、ごめん！」

やっと言えた、セーヤは何か一気に脱力したようにスツとした。

「えつ？ どうして謝るの？」

ユズカは何も心当たりがないために、予想外の謝罪にさつきより困ってしまった。

「えつ、あつ、いやー、この前変なこと聞いたこと。……赤吹さんは如月サツキじゃないかって。そう言うのと、赤吹さん、急に暗くなったからさ、もしかしたらタブーだったのかって思って、それを謝っておきたくて」

ちようどそのとき突風が吹き、木の葉が数枚2人の間をひらりひらりと宙に舞い、音も

立てずに静かにその地に降り立つと彼女は話し始めた。

「……実は、謝るのは私のほうなんです。ごめんなさい！」

逆に謝られてセーヤにはわけがわからなかったが、彼女は続けて言う。

「橋野君には嘘をついていました。私は、みんなの言うとおりに、……実は如月サツキなんです」

まあ、セーヤにはわかっていたことであつたのでさほど驚きはしなかったが、でもどうしてうそをつく必要があつたのか、それがセーヤは気になった。

「そうだつたんだ……。でも、どうして嘘をついたの？ 黙っておくことでもなかったんじゃないあ」

再びセーヤに背を向ける。

「私、本名は赤吹ユズカっていうんです。もちろん如月サツキっていうのは芸名なんですけど。前の学校では友達のみんなが私のことをサツキって呼んでいて仕方ないかと思っていましたんですけど、だんだん私は“赤吹ユズカ”じゃなくて“如月サツキ”になつていているようで……。私を“赤吹ユズカ”として見てくれる人がいないんじゃないのかって感じて……。そう思つたらたまらなく悲しくなつて、それで思い切つてここに転校してきました。あの場所で初めて橋野くんに会つたとき、私を赤吹ユズカで見てくれて本当にうれしかつたんです。せつかくこういう人間（ヒト）に出会えたのは如月サツキになつてしまふんじゃないかって……。不安でならなかつたんです。だから……。ごめんなさい！」

震えた声でユズカは話した。目からは大粒の涙があふれていた。信頼できる人に悩みを打ち明けられて、今までクサリで縛られていた彼女の純粹な心が今ようやく解放された。

セーヤは深く納得したおももちで、しかし、彼女に対しどうしてあげることができなかつた。声をかける言葉さえ見つからなかった。

しばらくして、ユズカは涙をぬぐって、

「ごめんなさい、今日はこれを渡そうって思っていたんです。学校の中ではできないからここで待っていたんですけど」

そう言うところある一通の手紙を彼に差し出した。

## Ordinary 4. 積もる話

## Ordinary 4. 積もる話

「なんですかこれ？」

「いいから、開けてください」

ユズカはなぜかせかしたので、言われるがままにそれを開けると中には一枚の便箋が入っていた。

セーヤ君へ

久しぶり！ 元気してた？ 突然こんな手紙をユズカからもらって、びっくりしてるでしょう。

もうセーヤ君が引っ越して数えてみたら8年も経ってたんだね。今までちつとも手紙を書かなくてごめんね。

8年前のセーヤ君しか知らないから、今どうなっているのかすっごい楽しみなんだ。

っていうのもね、私も今度セーヤ君の学校に転校することになったの！

実は、私のお父さんが勤めていたところがセーヤ君のお父さんが勤めている会社とひとまとまりになるようで、お父さんがセーヤ君のお父さんの会社に行くことになったんだ。はじめは単身赴任をすることも考えてただけけど、お母さんが「ぜったいお父さんが一人暮らしするなんて無理！」って反対するから、家族みんなでそっちに行くことになったんだ。

お父さん、昔からめんどくさがりだったらしいから、お母さんはお父さんのこと心配してるんだらうね。

そういうわけだから、またセーヤ君と会えるんだ。楽しみにしてるよ。

野原コトネ

(野原コトネ？ だれだっけ?)

のどまで出てきているのにどうしても出てこなかったが、“コトネ”という名前にある懐かしさがこみ上げてきた。

「あつ！ もしかして、あのコトネちゃん？ どうしてコトネちゃんからの手紙を赤吹さんがもってるんです？」

当然といえば当然の疑問である。コトネとセーヤは幼なじみで、ユズカはあの如月サツキ、そのユズカがコトネの手紙を持っていたのだから。

「だって、私とコトネはいとこ同士なんですよ。知らなかったんですか？」

「……ええっ！！」

ユズカの衝撃的一言を聞いた耳が信じられなかった。

「実は今日はそれを渡そうと思って来たんです。コトネにわたすように頼まれて……ちよつといやなところを見られちゃったけど、今日はうれしかったです。ありがとうございます。……います」

そういうとユズカはセーヤの元を離れていった。セーヤは右手に手紙を持って、その手紙をじっと見ていた。いろいろなことが立て続けに起こったせいで頭の中がパニックに陥っ

だが、昼休み終了を告げるチャイムが鳴ったとたんセーヤは我に返り、パンを口に突っ込んで急いで校舎へと走っていった。

セーヤには今日、いろいろ予想しがたい出来事が起こったので部活をする気になれなかったから、セーヤはそのまま帰ろうとした。すると後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「せんぱ〜い！ 今日部活しないんですか？」

フルートを持ちながら、走ってきたのだろうか、リホが息切れをしていた。

「今日は気分が悪いから帰ることにするよ。先輩にそう言っておいてくれる？」

「二人で大丈夫ですか？」

セーヤは何も言わず、ほほえんで彼女に手を振ってそれに答えた。

セーヤは自転車をこぎ出した。こぎながらこの町へ引越す日のことを思い出していた。コトネと彼女の両親が、僕たちが見えなくなるまでずっと見送ってくれたあの日のことを。

「サツキさん、サインください！」

その頃ユズカは吹奏楽部の三年生にサイン攻めに遭い、困った様子を少しかもし出してはいたものの笑顔でサインをしていた。転校してけっこうな時間がたったが、未だに如月ブームが冷める様子はなかった。

「せっかく来たんだから何か楽器吹いてみる？」

「えっ？ いいんですか？ じゃあ……、トランペットを吹いてみようかな」

「へえ、サツキちゃんってトランペットに興味があるの？」

「あ、はい、少し」

先輩はユズカを連れてトランペットのところまで行った。

「あれ、今日は珍しく橋野君がいないな」  
すると近くで練習していたリホが、

「橋野先輩なら私さつき会いましたよ。なんか今日、気分が悪いとか言って帰りましたよ」  
「へえ、珍しいこともあるもんだね。あの橋野君が部活休むなんて。明日は雪でもふるのかな？　なんて。……えっと、あれ？」

先輩が後ろを振り向くとそこにユズカの姿はなかった。

ユズカはそのままダッシュで2-3の教室まで行ったが、そこでもサイン攻めにあってしまった。しかしそこにセーヤの姿はあるはずもなかった。

(橋野君、もしかして……)

ユズカには心当たりがあった。きつとあのことだろうととても心配になった。コトネとセーヤが直接電話で話せばよかったのだが、コトネたつての願いで手紙を渡すことになったのだ。お互いちゃんと会うまでって。それがかえってセーヤの心を不安定にさせたようだ。ユズカはセーヤをとて信頼している。いやそれだけではなく、何か別の大きなものがユズカの心に湧きあがろうとしていた。

セーヤは家に帰るなり自分の部屋にこもった。

「お兄ちゃん、帰ってきたの？」

返事がなかったたのでミミはさらに言う。

「今から、ミツル君といってくるからね！」

「お兄さん、何も言っていないけど大丈夫なのかい？」

ミミはこっくり首を縦に振った。だてに何年も1つ屋根の下で暮らしているわけではなく、ミミにはセーヤの様子を十分に把握していた。

そのとき急に部屋のドアが開いてそこからセーヤの顔がひよっこり現れた。

「いってらっしゃい」

そういうと首を引っ込めてドアを閉めた。ミミは微笑んでミツルを連れて出かけていった。その様子を部屋の窓から見ていたセーヤはなぜかほころんだ。

一週間ほどたったある日、学校全体を揺るがす大事件が起こった。

サツキが吹奏楽部に入ったというのであるが、何より驚いたのが吹奏楽部員。その中でもセーヤは人並み以上に驚いた。パートは先輩のたつての希望でクラリネットになった。

この頃は少しずつではあるが如月ブームが終わろうとしていた。如月サツキがいることはもう特別なことではない、そう定着していったのである。

しかし、ユズカにとってはあまり好ましくなかった。赤吹ユズカでありたい、そう願っているが世間ではそんな願いは無力であった。

ユズカにとって唯一、部活のときだけホッとできる時間であった。というのも、みな如月サツキというよりそれ以前の一人の女の子として接してくれている、そう感じる事ができたからだ。ユズカにとってたいへん幸せなことである。

部活が一緒だからだろうか、最近はセーヤとユズカは一緒に帰ることが多くなった。話すのは一方的にユズカの方で、セーヤは聞くほうに回っていたが、そのたびに、明るくなった、セーヤはユズカのことをそう思うのであった。

さらに一週間ほどたったある日、セーヤが家に帰るとある一人の女性が玄関前で立っていた。携帯電話の画面を見ながらボタンをカチカチ押していた。

彼女はセーヤに気づいたのか手を振った。

「うわー！ 大人になったね、セーヤ君」

「もしかして……、コトネちゃん？」

「もしかしてってどういう意味？」

「……そういう意味だよ」

「あははっ！ それにしても久しぶりだね。もうあれから8年たったんだね」

「そっかー、ほんとに引越してきたんだコトネちゃん」

「こんな大きくなったセーヤ君に“コトネちゃん”って呼ばれるのもちよっと恥ずかしいかな。でも、なつかしい……」

セーヤはドキドキしていた。セーヤの記憶にある小学3年生のコトネと、今現在彼の目の前にいるコトネとはあまりにも違いすぎて、大人になったというか一段とかわいくなって、一人の女性、そういう感じになっていたように感じた。

「ユズカから話は聞いていたけど、あの泣き虫がこんなになるなんてね。ほんと信じられない」「ハハハ、そういうコトネちゃんこそ大人っぽくなったよ。あのワンパクな頃とは比べ物

にならないくらい」

「何？ それでも口説いているつもり？」  
頬を赤らめて言った。

「そんなんじゃないって……」

二人は玄関の前で話し込んだ。

しかし8年のブランクはあまりに大きかったが、二人はやはり幼なじみであった。そんなブランクなどはじめから無かったかのようにであった。

## Ordinary 5. 懐古がよみがえる時

## Ordinary 5. 懐古がよみがえる時

コトネが引越してから数日たった。

コトネもセーヤたちと同じ学校に転校したが、彼女の姿はあれ以来一度も見えていなかった。あの会話のあとセーヤはコトネの携帯電話の番号を聞いていたが、セーヤにはかけるつもりは無かったしその必要もなかった。確かに8年というブランクが2人の間にはあったが、この間の再会で十分埋め尽くすことができたと思っていたからである。

一方コトネは、心の隅にはいつもセーヤからの電話を待っていた。別に毎日じゃなくもいいから、ただ、彼の声が聞ければそれでよかった。彼女の中の8年というブランクはいまだに埋め尽くされてはいなかった。

ユズカは仕事が休みのときはよくコトネと遊びに行く。人にばれないようにサングラスをかけ深々とぼうしをかぶり、客観的に見たらちよつと怪しい人ではないかと思われるくらいに格好をして出かける。しかしその格好が意外なほど他人には彼女が“如月サツキ”であるということが分からないので、少ない休みを彼女といっしょにシヨップینگやカラオケなどの心のうさ晴らしにあてたのであった。彼女といっしょにいるときも必ずコトネは、心の片隅では携帯電話の受信反応を待っていた。

そして、再開後2週間、夜も遅い時間に橋野家に1本の電話がかかってきた。

「お兄ちゃん、でんわだよ〜」

セーヤを茶化するような声でミミは2階にいる彼に向かってそう叫んだ。

「お兄ちゃん、がんばって！」

彼女は意味深な言葉を発したが、彼にはどうも意味がわからなかった。

「もしもし……」

「セーヤ君？ どうして電話かけてこないの？ 私、ずっとあなたからの電話を待ってたのに」

受話器からの声は昔よく聞いていた声とよく似た声、コトネだった。

「ああ、コトネちゃん？ この前たつぷり話したじゃない。あの時話したいことはほとんど話して、もう話すことなんかないよ……」

「あ、そう。そうだよね……。邪魔してごめん。じゃあまた明日ね。バイバイ」  
プーツ、プーツと電話が切れた音がした。

セーヤはゆっくりと受話器を置き、部屋に戻ろうとした彼をミミがとめる。

「あれ〜？ お兄ちゃん、意外に早かったけどどうだったの？」

「……何が？」

「何がって、あつ、なるほど。はは〜んそういうことね。大切にしてあげないとだめだからね」  
ミミだけが妙に納得して、セーヤは彼女の言ったセリフに首をかしげながら部屋へ戻った。

次の日、セーヤがいつものように登校していると、初めてユズカと会ったあの場所にまたユズカがいた。

「おはよう、赤吹さん。またここで転んだんですか？」

しかし、どこにも転んだ形跡は見当たらないし自転車もきちんと立たせてある。

「あ、おはよう。……別に転んだわけじゃないんだけど。ただ、なんとなく懐かしくて」「なつかしい?」

彼にはよく分からない返答だった。

「うん。今の生活が楽しいと感じることができた、そのきっかけとなった場所だから。あの学校に転校することになってはじめて会ったのが橋野君で本当によかったなって。もし橋野君じゃなかったら、私、いまはもう違う高校にいたかもしれないから。だから、ありがとう」

「そんな……、たいしたことは何も……。それに、きっかけを作ったのは僕じゃなくて、この場所で転んだ赤吹さんじゃない」

「……」

ユズカは何も言わず、彼のほうも向かず、まっすぐ川のほうを向いてほほえんだ。その表情は誰にも見られなかったが、それは彼女にとってブラウン管の中でも見せたことのない最高の笑顔だった。

「それじゃあ、お先に。遅れないようにね。あの高校、遅刻にはやたらとうるさいから」そのまま再び自転車をこいで、彼女の後ろを通りすぎていった。

ユズカはセーヤの後ろ姿が見えなくなるまで眺めたあと、自転車の支えを倒し学校へと向かった。

その日、学校ではコトネの話題でもちきりであった。コトネはもちまえの明るさと性格

のよさで、男女を問わずすぐに多くの友人を得ることができたが、彼女は男子にとっても気があった。

セーヤの友達であるケンもその一人であった。

「なあセーヤ、今度転校してきた、あのコトネちゃん。かわいいよな」

「へえ、そうなんだ。如月サツキのほうはどうなるんだよ」

「サツキちゃんはファンのほうに入るからな。コトネちゃんはファンというものは別。コトネちゃんとならぜんぜんOKだぜ」

「何が『ぜんぜんOK』なんだよ?」

「もちろん、俺の……、カアーツ、何を言わせようとしてるんだよ、セーヤ!」  
バンツとセーヤの背中をフルスイングでたたいた。

「うぐツ、ゴホツ、ゲホツ……、いつて、何するんだよ!」

「まあまあ、それより我が友なら応援してくれよな。俺の将来を」

そう言っていると、他人から見ても明らかにウキウキ気分でケンは彼から離れていった。

「なんなんだ、アイツ?」

昼休み。セーヤはいつもの木の下へ行つてパンをほおぼっていた。

ふと視線をあげるとなんと、すぐそこにコトネがやってきた。

「コトネちゃん、どうしてここに?」

「ユズから聞いたんだ。セーヤ君はいつもここでお昼ご飯を食べてるって。いっしょに食べたい?」

「……うん、いいよ」

コトネは走ってきたのか息づかいが荒かったが、ゆっくり息を整えたあとセーヤの隣りに座り、持っていた弁当箱のふたを開けた。セーヤが彼女に気付かれないようにその中身を見ていると、やっぱり女の子なのであろう、女の子らしいおかずだった。

「何、それ。もしかしてコトネちゃんが自分で作ったの？」

「えっ、うん……。どう？　かわいくできてる？」

ちよつと赤面しながらも髪をかきあげるかわいいうささをしながらセーヤにたずねた。

「……うん、いいんじゃない？　そのたこさんウィンナーなんて王道だし。昔のコトネちゃんだったら似合わないけど」

「ハハッ、そうだよね。あのころは私よりもセーヤ君のほうが女の子らしかったからなあ」  
2人はこの前あつてからの出来事を話しながらご飯を食べていたが、セーヤが彼女にこんな質問をした。

「コトネちゃん、この8年間どうだった？」

なんとなくぎこちない話し方だった。

「結構楽しかったよ、それなりに。セーヤ君がいなくなつてからしばらくはさびしくてずっと泣いてただけだけどね……。そうそう、中3のときにね、合唱コンクールで私たちのクラスが優勝したんだ。それで先生がおごってくれたんだけど、それがすごくてね。『シベリアンK2』っていうのをもらったんだ」

「シベリアンK2？　何それ、聞いたことないなあ」

「知ってるわけがないよ。だって、それ先生のお手製ドリンクだったんだ。みんな初めて

見たから素直に喜ばなくてね。先生がのめって脅すからみんな飲んだんだけど、それがすつごくまずいの。後でわかったんだけど、それは原料がなんと片栗粉でね。わけわかんないでしょ」

セーヤは笑いながら大きくうなずいた。コトネもそれにつられて笑い出した。

「それで、あとで先生に抗議しに行ったんだ。先生は素直に罪をみとめてね。『ゴメン、ゴメン、ゴメリンコ！』なんてわけのわかんないこと言い出してね。回りの先生たちも笑ってて。……あれがほんとに楽しかったな」

「ぷぷっー！ なんだ？ その謝り方。わけわかんないな。それにしても楽しい先生だね」  
「しかも、修学旅行にまでそのドリンクをもってきてね。どうしようかと思ったよ、あのときは。飲まないところはん食べちゃいけないって言うてくるし」

二人の会話に笑顔が絶えなかった。

2人とも外見は変わってしまったが、8年前のあの2人の関係が徐々によみがえってきているようであった。

2人の近くで、2人の楽しそうな会話を陰からのぞいているある人物がいた。

「どうしてセーヤはコトネちゃんと仲がいいんだ？ セーヤなんかより俺の方がずっと……」

そのときセーヤは背筋がゾクツとする感じを受けた。辺りを見回してみると逃げていく人影が見えたが、メガネをはめていなかったためにそれがだれなのかを確かめることができなかった。

「セーヤ君、どうしたの？」

「ううん、いや何でもない（まさか、……な）」

その人物はセーヤに勘付かれたと察し、早めにその場から離れていたのだった。二人は最高に盛り上がり上がっていたのだが、時間が二人を邪魔することとなった。

「さて、もうそろそろ教室に戻ることにするよ」

「ええー、もう？ まだいいじゃん。もう少しいっしょにしようよ」

「……ごめん。次の授業は先生が厳しい人だから。遅れたらやばいんだ」

コトネは、じゃあ仕方ないというおももちでゆっくり立ち上がり、そしてお尻の土を手で払ってセーヤのほうをむいた。

「じゃあ、またあとでね」

コトネはピンクの弁当箱をもって教室へと戻っていった。

「またあとで……」

セーヤが教室に戻るとそこにケンが待ち構えていた。

「放課後ちよつと……」

低い声でそうとだけ言うと、ケンは自分の席へ戻って腕を組みながらゆっくり座った。ケンのあのような態度をセーヤは今まで見たことなかった。

授業中のケンにはさっきの感じはしなかったので、セーヤは少し安心した。さっきのは気のせいだと思うしかなかった。

放課後、ケンとセーヤはある一室で向かい合っていた。

「セーヤ、率直に聞くがお前とコトネちゃんとはどういう関係だ？ 今日の日、お前、コトネちゃんといっしょにいただろ？ ……おまえがうそをついていたことなんてどうでもいい。俺はただそれが知りたいだけだ」

いつにもまして真剣な顔つきをしている。

「僕とコトネちゃんは単なる幼なじみさ。それ以外のなんでもないよ。8年前に僕がこっちに引越して離ればなれになったんだけど、最近彼女もこっちに引越してきて、久しぶりにあったところなんだ」

セーヤはそう説明した。

「幼なじみ！？」

ケンはずいぶん背を向けて大声で笑うしかなかった。